

## 地域活動拠点としての寺院に関する考察：社会教育の視点から

著者	原 さゆり
雑誌名	茗溪社会教育研究
号	5
ページ	97-98
発行年	2014-06-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00123165">http://hdl.handle.net/2241/00123165</a>

## 地域活動拠点としての寺院に関する考察 —社会教育の視点から—

原 さゆり\*

### 1. 本研究の目的と方法

近年の社会教育は縮小傾向にある一方で、NPO などの市民セクターが活発になっており、社会教育の活性化につながっている。こうした市民セクターの活動拠点は公的社会教育施設だけに限らない。社会教育の活性化を考えるうえで公的社会教育の把握する事業や施設のみにとどまらず広い視野でもって地域施設や地域住民の活動に着目する必要があると考えられる。

近年、寺院のなかには、「葬式仏教」批判や人々の仏教離れに対応して、寺院を檀信徒に限らず地域住民に開いていこうとする動きがある。本研究の目的は、地域の寺院が、社会教育の場として地域活動拠点となる可能性を示し、寺院が地域活動拠点となる要因を見出すことである。本研究では、寺院を地域に開かれた学習活動拠点として捉えたい。

### 2. 構成

序章 本研究の目的と方法

第1章 地域活動拠点としての寺院

第1節 伊藤道機寺院と社会教育の認識

第2節 社会教育と宗教に関する議論

第3節 現在の社会教育情勢と寺院における社会教育

第2章 現在の寺院活動の動向

第1節 宗教界の社会へのアプローチの動向

第2節 地域活動拠点としての寺院の動向

第3章 震災復興での寺院の役割—宮城県亘理郡山元町普門寺を事例に—

第1節 東日本大震災と山元町

第2節 テラセン

第3節 土曜日の会

第4節 地域に開かれた寺院

第5節 地域に開かれた寺院における住職の役割

終章 本研究のまとめ

---

\* 筑波大学人間学群教育学類4年

### 3. 概要

第1章では、寺院を社会教育の場として捉えた先行研究である、伊藤道機の『寺院と社会教育』(1958)を取り上げ、伊藤が寺院を社会教育の担い手として論じた背景や意図を考察し、不十分性を指摘した。伊藤は宗教施設である寺院と社会教育を論じるうえで、政教分離について全く触れていない点に不十分性がある。しかし寺院を拠点とする学習活動は「公的社会教育」ではなく「民間社会教育」として取り組む場合、政教分離については問題とならないことを確認した。

第2章では、葬儀や法要といった寺務以外の地域活動に取り組む寺院の動向について紹介した。寺院は「葬式仏教」批判や、人々の価値観の変化から存立の危機にあるが、それに対応して様々な研究、取り組みがあり、寺院のボランティア、NPO 活動が盛んになっている状況を概説した。さらに、寺院が檀信徒に限らず地域に開いた活動を行う事例を紹介し、存立の危機にある寺院が地域に「なくてはならない」と認識されるには、寺務を大切にしたいうえで独自の地域活動に取り組むことが必要であると指摘した。

第3章では、宮城県亘理郡山元町普門寺を事例として、震災復興という状況のなかで地域に開かれた寺院となっていくプロセスを分析した。寺院がボランティアセンターや住民の会の活動拠点となることは、檀家制度という地域との信頼関係を土台に、地域住民の結節点になると論じた。また、地域活動拠点となった寺院には、地域に開いていこうとする意志を持った住職の存在があることを指摘した。

終章では、社会的信頼性が地域において高いことを強みとして、寺院を地域に開いていく意識を住職が持っているという条件が揃えば、寺院は身近な学びの場となる可能性がある結論づけた。

### 4. 主要参考文献

伊藤道機『寺院と社会教育—現代寺院の新しい社会的活動のために—』小峰書店、1958年。  
上田紀行『がんばれ仏教！ お寺ルネサンスの時代』NHK ブックス、2004年。